

新山協ニュース

▲ 発行者 平田 大 六

▲ 発行所 新潟県山岳協会

〒951 新潟市下旭町109

鈴木敏雄方

TEL 025-222-9548

年頭のごあいさつ

協会長 鈴木敏雄



新年あけましておめでとう
ございます。

皆様には希望に満ちた新春
をお迎えのことと心からお慶
び申し上げます。

昨年は、県山岳協会の事業
活動に深大なるご理解をいた
だき、また物心両面にわたる
多大なご支援ご協力をいただ
き、お陰様にて今年度は、所
期の事業活動も順調に推移い
たしましたこと、ここに厚く
御礼申し上げます。

私も昨年4月、室賀前会長
の後をお引き受けし、暗中模
索の状態の中ではや一年を迎
えますが、理事、役員の皆さ
んに支えられ、暖かいご支援
とご指導ご協力により今日に
至っております。

憶えば、昨年は、吾々を取
りまく山岳界においても、周
囲の環境は非常に厳しい状況

の中に置かれており、協会員
の皆さんには等しくお互いに
多難の年であったのではなかつ
たかと思っております。

春山の残雪季における遭難、

夏山の事故、遭難等々、皆さ
んも夫々ご苦労の多かった年
ではなかつたかと痛感し、責
任団体としての山岳協会とし
て、この遭難の実態は避けて
通れない事実であり、これを
踏えて今後どのように対処し
指導を進めるかが当面の課題
であり、今更ながら苦慮いた
しておるところであります。各
山岳会においても、この遭
難対策等について再度深いご
理解とご協力、更にこれの方
全な対応策等について、切に
重ねてお願い申し上げます。

遭難防止の手段としては当

然のことながら論議は多々あ
ろうかと思いますが、まず何
よりも登山者自身の自制が肝
要であり、登山者に対する強
力な指導と関係機関との連携
による指導強化と併せて、そ

れに関連する施設の充実が先
決ではなからうかと考えます。
しかしながら、近年の傾向と
して、登山人口は従前にも増
して増加の一途をたどってお

ります。いわゆる未組織登山
者の増加が顕著で、また近年
の風潮として、若者の山岳会
からの組織はなれも随所に見
受けられる現象は、真に遺憾
であり、加えて未組織の中高
年登山者が盛んとなりつつあ
る傾向から、これらの現象が
長じて組織的な山岳団体の弱
少化へとつながり、山岳会の
運営に多分の影響を与えてい

ることも、事実否めない要因
と認めざるを得ない状況では
なからうかと思われま

このように厳しい周囲の環
境から、吾々に直接関連する
遭難に派生する諸問題をはじ
めとし、組織の強化等を考え
るに、解決すべき問題は沢山
あります。要は登山に関す
る環境基盤と財政基盤の整備
が急務であり、各山岳会にお
いても会運営の健全化を図る
ため、基盤整備を更に一段と
強化し、山岳協会としても責
任団体としての自覚のもとに

広く県民を対象に、地域の中
に浸透する組織と体制づくり

に務め、協会としての存在価
値と安全登山・公德登山を掲
げ積極的にこの輪を展開しよ
うではありませんか。

県下各山岳会の皆さんによっ
て支えられる協会は、社会的
に非常に大きいものがあり、
従来からの親睦、技術研修、
団体登山などの一次活動から
一歩前進して、更に、自然保
護、遭難対策、地域での社会
体育活動への参加、更に国際
交流の課題等、責任団体とし
て期待されておるところであ
ります。

当面、なさねばならぬ事柄
は山積していますが、何より
もマンネリ化しがちの協会事
業に、加盟団体が積極的に参
加協力する体制づくりが第一
の急務と考えられ、協会とし
ても独自性を失うことなく、
会員相互間の合意を深めるよ
うお互い会員同志も努力し、
緊密化を図りながら意欲的に
活動し、文字通り県内岳人の
クラブ的な協会に進展させた
いものと願っております。

本年も協会では、各山岳会
同様に海外交流登山をはじめ
とし、それぞれ各専門委員会
は多くの企画がなされ実施の
段階に到っており、皆さんの

熱意と連帯で、持てる力を十二分に發揮して、登山を通じ県山協の充実に積極的に取り組んで参りたいと考えるところから、ぜひとも会員の皆様にご利用に、率直かつ建設的なご意見等々ご提案くださるようお願い申し上げます。次第であります。

終わりに、会員皆様のより一層のご理解と、先ず各地域での底辺の拡大とともに組織

ロシア連邦カムチャツカ州

トルバチェク峰 (3682M)

登頂報告 (完)

五十嵐 篤 雄

16時45分、標高9500メートル低灌木の中に避難小屋があり、チェルダックと書いてあった。イワシトンボのような大蚊がまわりついて、うるさい。ここがベースキャンプなのが一寸不安だったがその心配はない。通訳に聞くとトラックが迎えにくるという。霧の草地で彼等が焚火をはじめた。馬穴のような器で湯を沸かし、紅茶を出してくれ

た。寒い程ではないが蚊を追い払うために焚火にあたりながらの紅茶はおいしかった。

の強化をすすめられ、広く県民に、安全に自然を親しみ樂しめる豊かな心と健康づくりのために活動の輪をより以上に拡げられると共に、協会組織に従来にも増してご理解をいただき、重ねてご協力を切にお願い申し上げますとともに、今年も加盟各山岳会のみならずのご発展と、会員皆様のご活躍を心より祈念し年頭のごあいさつといたします。

をたてながらゆっくり登る。霧で遠くは見えないが、砂礫に取り残されたようなポツンポツンと紫色、黄色の花をつけた高山植物の塊が目につくようになる。トラックの揺れが激しいので高山植物に詳しい加藤隊員も花の名を確認できないようだ。

日本との時差4時間(ハバロフスク2時間、更にカムチャツカ2時間)、霧のため夕暮れ近いようだが、なかなか日は暮れない。広い砂礫を大きく電光形に登る。途中エンジンがオーバーヒートで中休み。やがて小屋が見え、そこに手を振っている二人を確認できるようになった。ここがベースキャンプ地である。20時25分、標高12000メートル。

トルバチェク峰は1976年に噴火、1979年に月面探査用の月面車のテストと訓練のために建築した山小屋が残っており、ここが私達の宿舎となる。

別棟に狭い食堂がある。通訳が「食事できました」と呼びにきた。全員集合、はじめて自己紹介となる。リーダー、コウリヤ、軍人、コースリーダー、ワリアラー、

弁護士。サポート、イルシャ(女)、コンピュータエンジンニア。サポート、ニーナ(女)、弁護士。サポート、サツシャ、医師。運転手、ユリー。登山専門家、ゴラー。通訳、アレクセ、大学生。

私達が持参したサントリールオールドで乾杯となる。食事はニーナ、イルシャ、他のスタッフが狭いところで一生懸命作ってくれたもので、口に合わないなど言う訳にゆかない。オイシイ、オイシイと食す。スタッフも満足げな表情であった。

6月28日(水)、霧、気温8度。標高24000メートルの前進キャンプに向かう。9時、広大な溶岩と火山灰の広がる砂漠のような山容に登山道などある筈がない。テレビ、写真等で見た月面の形相によく似ている。小さなクレターが幾つかあり植物は一切なく、とてつもなく広い死の世界に彷徨い歩いているような錯覚を起す。私達は方向の判断が困難で言葉の通じないロシア人スタッフについて行く形になる。やがて雪渓にでる。雪の表面は火山灰に被われているので雪渓を登っている感

じはないが、安易に歩いていると突然踏み抜きバランスを崩す。

火山灰雪渓から岩礫伝いに移り、火山岩の岩尾根を登り切ると前進キャンプ予定地である。15時30分、岩尾根の窪地に幕営。気温3度、風は冷たく寒い。トルバチェク峰から派生している谷向いの雪に被われた巨大な岩峰の上部は濃霧で見えないが、中央の谷に氷河の末端の盛り上がりが無気味に見える。

トルバチェク峰は雲に被われ全く見えない。岩尾根の冷たい風に吹かれながら立った俛、ロシアのスタッフと一緒にの食事、砂糖のたっぷり入った熱い紅茶は何よりの御馳走であった。テントに入る頃、小雪がぱらついてきた。

6月29日(木)曇り時々日が射す、気温零下2度。今日は頂上アタックの日である。通訳も一緒に登るのでアクシデントが起きた場合の対策を考慮し、望月隊員他3名と運転手のユリーをBC・ACに残し、ロシア隊7名、日本隊9名が7時に頂上に向かう。岩尾根を登り切ると雪である。谷向いの巨大岩尾根から



壁をキックステップで電光形
トルバチェク峰 山頂(3682m)

新潟県山岳協会旗をなびかせ全員記念写真を撮る。風で雪が飛ばされ溶岩の露出しているところ、奇妙な結晶体の小石を記念に拾い10時40分下山開始。

往路下山である。トップはコースリーダー、ワリアラー、リーダーは常にセカンドかサードで指示をしている。確実な踵ステップで下降、日本隊も歳はとっているが流石、危な気無い足取りで下る。

広い内院の雪渓であると風は納まり日も射してきた。危険個所は過ぎた。満ち足りた足取りで登ったときのトレースを辿る。

12時30分、前進キャンプ到着。昼食は黒パンにバター、熱い紅茶は疲れを癒してくる。

テント撤収、工程16キロのベースキャンプに向かう13時。やがて雪がなくなり赤い火山砂利(植木鉢に使う富士砂のような)に残る踏み跡を辿る頃、高山植物リシリヒナゲシが黄色い花を震わせている。何を求め彷徨い歩いているのか御鉢程のカムチャッカ熊の糞を見る。標高が下がるにつれ、岩陰にクロクモソウ、チョウノスケソウ、イワウメ、チシアママナ、等の花が姿を現す。

7月1日(土) 晴後曇り、気温8度。下界は晴れ、赤い砂漠がところどころに盛り上がったように見える。煙はでていないが噴火の跡である。上部は雲に被われ山は見えない。トルバチェク峰登頂の晴れはまさに千載一遇のチャンスであった。迎えるヘリコプターはベースキャンプまでこない。どうゆう事情なのか分からないがチュルダックのヘリポートまでトラックに乗せて貰えず、荷を全部背負って歩くことになる。リーダーのコウリヤ、運転手ユーリー以外のロシア、スタッフも一緒に

12時出発、丘陵帯の下りになるが人為的なものは一切無く、トラックの轍を頼りに歩く。ところどころに高山植物の群落があり、速くから目立つのは黄色いリシリヒナゲシの花である。お花畑の中に釜の蓋程のカムチャッカ熊の新しい足跡が彼方の森林帯に続いていた。姿を見ることができず残念だった。チュルダック近くなるとキバナシヤクナゲ、イゾツガザクラ等が現れ、ミヤマハンノキなどの灌木地帯になる。湿性の草付にハクサンチドリ、エゾムラサキ、ミヤマハンショウヅル、ツルリンドウが咲いていた。チュルダックで焚火をたき、食事を摂る。漬したジャガ芋、煮豆が旨かった。砂糖のたっぷり入った紅茶を飲んでいる頃、ヘリコプターが迎えにきた。

私には2度と見ることでない此の風景とお別れである。14時20分フライト、途中給油し岳樺の原生林上空を飛行。エリゾバのヘリポート着。17時20分、迎えるワゴン車で、ペトロパブロフスクのゲーゼホテルに向う。

押しだされている氷河が目の前に大きく迫る。広い谷の雪原を歩いている頃、好天の兆しか、時々雲が切れ彼方に白いピークが見える。これが初めて見るトルバチェク峰だった。

谷が徐々に狭まり、傾斜も強くなっていく。クラストした雪の上に新雪が積もり、突風がくると地吹雪になる。それを避けるため岩尾根と雪深の接続を登るが油断すると足元の岩礫が崩れバランスを失い落石を起こす。両手を使って登る。

頂上直下のクラストした雪壁をキックステップで電光形

に登る。ロシア隊は全員40歳代、日本隊は考えていることと体が一致しない平均年齢61歳、幾度かロシア隊員に助けられたことか。

10時15分遂にトルバチェク峰に登頂、日コ両隊員は抱き合い握手、頂上に達したことを喜びあった。

大クレーターの底を見たく縁に近づいたがスケールの大きさに呑み込まれ恐怖感が先にて、見る事ができなかった。その巨大岩壁に立ち込めた霧が強風で舞い上がり流れているのが一層凄まじさを増す。

リーオールドで乾杯。4日間行動を共にしてきた通訳アレクセさんは最初の頃から比べくと大分日本語が上手になった。通訳頼りの会話で大賑わい、明るく人懐っこいロシアのスタッフであった。

6月30日(金) 小雨、気温14度。ベースキャンプ地まで、ヘリコプターが迎えにくる予定だったが濃霧のためフライドできず今日一日停滞。霧雨の中、近くを散策。小屋の中では蚊に閉口するが室賀隊長持参の蚊取線香の効果抜群であった。

7月1日(土) 晴後曇り、気温8度。下界は晴れ、赤い砂漠がところどころに盛り上がったように見える。煙はでていないが噴火の跡である。上部は雲に被われ山は見えない。トルバチェク峰登頂の晴れはまさに千載一遇のチャンスであった。迎えるヘリコプターはベースキャンプまでこない。どうゆう事情なのか分からないがチュルダックのヘリポートまでトラックに乗せて貰えず、荷を全部背負って歩くことになる。リーダーの

コウリヤ、運転手ユーリー以外のロシア、スタッフも一緒に

ホテルに日本人と思わしい男性が6名いた。聞くところによると日本山岳会東海支部、篠崎純一隊長以下5名の隊員で、環太平洋一周地球環境調査の目的で6月22日同じコースを辿りトルバチェク峰に登ったとのことであった。

カムチャッカ讃歌 ③

白夜の下で友好夕食会

日本山岳会会員 小 倉 厚

白夜とは不思議なもので、昼から夜へとつながる。ベース・キャンプの初日の夕食は午後8時40分から、それでもまだ明るい。いらいらしてはいけない。大国ロシアではこれがゆっくり運ぶ。

しかし、ロシア側隊員の歓迎はたいへんなもの。食事もロシアに来て初めてのスープ(ボルシチ風)付きで、小屋としてほまことに豪幸。我々も日本から持参した蜂蜜、ダルマ(ウイスキー)などを提供したので、ホテルなどよりずっとすばらしい晩餐となった。

まず、室賀隊長より挨拶、続いてアレクセイ君(ロシア側通訳)によるロシア側隊員

新潟県山岳協会が邦人初登頂の心積もりだったが結局第2登ということになった。

第1登、第2登は問題ではない。新潟県山岳協会のシルバー登山隊が完登したことに意義があると思う。私には生涯忘れられない山旅であった。

五十嵐篤雄、石田国夫、大橋栄蔵、小倉厚、加藤明文、加藤記代子、鈴木敏雄、内藤修、中村千代一、藤井信、本間一人、望月力の各氏の13名。

自己紹介では言葉が通じにくいせいもあって、みんな社長さん、局長さんと一格上がつて偉くなる。私などはエッセイストがどうしても通じないで、とうとう小説家(作家・ロシアでは大変偉い)ということになってしまった。

ベースキャンプの夜、健康な隊員たちのすさまじい野の狂騒曲。まるで遠雷のようだ。気にしたら眠れないが、いつしかとうとうとまどろむ。

次いで日本側隊員の自己紹介。片手落ちのようだから、こちら側の隊員の名もあげておこう。隊長室賀輝男、隊員

背中には重く汗ばんでくる。ガスの中で視界はない。溶岩の道は歩きにくい、ロシア隊員は2本のストックを使いグラスファイバーの靴をはき、我々より重いリュックを背負っても速い。若いせいもあるが強い。しかし、我々のペースに合わせてくれるので助かる。

雪深を幾度か踏む。出発して1時間半、左側にこんこんと湧き出る湧水(伏流から湧き出て流れになっている)があった。清冽な水で皆、我を忘れて水をすくった。

明ければ6月28日、いよいよ本格的な登山活動開始の日。ヘリコプター待ちにはいらいらさせられたが、今日からは泣いても笑っても自分の力に頼るのみ。まずは前進キャンプをつくる。15キロの行程、高度差1000メートルを一日で稼ぐ。

午前9時、日両隊そろっての記念撮影のあと、勇躍、北を目指して進む。曇天、気温8度とやや暖かい。しかし、前進キャンプまではキャンプ設営のための荷もある、

隊員

隊員



日程打合せ

(長岡新聞より転載)

冬山登山の警告

登山計画書はあなたの生命を左右するザイルです。

平成7年の冬山では、遭難した57パーティのうち42パーティ(74%)が登山計画書を提出してありませんでした。

●登山計画書の提出先

○登山地域の警察本部地域課等及び地元警察署、交番、駐在所。

○山域の登山指導センターや案内所、入山口の専門ポスト等。

○職場、学校、家庭等。

登山用品専門店

信頼できるパートナー

大新スポーツ

新潟市東堀6 ☎(025)222-3736